

武蔵野日曜集会

永遠の女性

――ガラテヤ書第6章――

1976年1月18日

小池辰雄

キリストの靈法 無の自覚 永遠の生命を持つている 小我が死んで大我がくる キリストと共に十字架されて我生く 雲の彼方には太陽が キリストの十字架の印 永遠の女性 太陽の如き女性 絶対者と結びついたところ キリストという永遠者 弔い合戦 永遠の女性われらを引きあぐ

【ガラテヤ6】

1 兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。2 なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法を全うせよ。3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。4 各自おのが行為を驗し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。5 各自おのが荷を負うべければなり。

6 御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。7 自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず、人の播く所は、その刈る所とならん。8 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈とり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命を刈とりとらん。9 われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。10 この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ。

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。12 凡そ肉において美しき外觀をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかには誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。15 それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり。16 此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あれ。



¹⁷ 今よりのち誰も我を煩わすな、我はイエスの印を身に佩^おびたるなり。
¹⁸ 兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵、なんじらの霊とともに在らんことを、アアメン。

●キリストの霊法

今日は、ガラテヤ書第6章、終りの章ですね。

¹ 兄弟よ、もし人の罪を認むることあらば、御霊に感じたる者、柔和なる心をもて之を正すべし、且おのおの自ら省みよ、恐らくは己も誘わるる事あらん。

パウロという人は非常に人間をよく知っている人です。「クリスチャン」と言っただけ、何も他の人と変わったわけでも何でもありません。みんな同じ人間です。躓たり転んだりする。聖霊にある者は人を審いてはいかん。だから、

「柔和なる心をもて之を正すべし」

と言う。

「本当の友情をもつてお互いに語り合おうではないか、自分を省みてみれば同じことではないか」

と。こういうわけです。

² なんじら互いに重きを負え、而してキリストの律法^{おきて}を全うせよ。

パウロは、ユダヤ教の律法即ち、モーセの律法に対して非常に忠実な男でした。それでも、福音を知ってから、彼はそれが本当でなかったことに気がついた。だから、ロマ書7章もあるわけです。

「ああ、我悩める人なるかな」

と。自分ではどうにもならん。

「互いに重きを負え」

と言う。これは私はよく「担いの心」と言いました。

「聖霊の愛をもつて重きを負いなさい」

と。愛は力を持っていますから。愛のない者は本当は人の荷物を負うことはできない。それは、嫌々ながらとか、あるいは命令だとか、あるいは義務だとか、そんなことでやるかも知れませんが、それは本当ではない。喜んで、

「よし、私が引きうけた」

と、みんなが嫌がることを進んで喜んでやる。これがその「重きを負う」ということ。これは聖霊の愛、御霊の愛がなければ、このことはできない。その御霊の愛をもつて重きを負うことが即ち、キリストの律法なんです。

「キリストの律法を全うせよ」



というのは即ち、愛をもって担うこと。もうひとつ簡単に言うと、

「十字架を担う」

こと。十字架を担うことが、これが即ち「キリストの律法」です。およそ、言葉の上からは矛盾するようなことですが。キリストの律法というのはそういうことです。

「愛は律法を全うする」

という。モーセの十誡を全部、本当に全うするものはこのキリストにおいて実証されたところのあの愛です。地上の生涯は正に、キリストはそれをもって貫かれた。特に伝道の3年というものは。人間の生涯というものは長短ではない。キリストの伝道3年は、これは永遠の3年ですから。

「キリストの律法」と、パウロは珍しい言葉を使っていますが、正にキリストの霊法、であります。霊的法則。これが神の――さつき司会者が言ったように、頭から湯気が出ているような人――霊的波動が自然に流れているような人、それは聖霊の愛の現象です。それは深い人間性をもっている。決して人間性を没却したものではありません。

●無の自覚

3 人もし有ること無くして自ら有りとせば、是みずから欺くなり。

非常に面白い言葉です。この訳はなかなかうまいと思います。「メーデン ホオーン」という字です。英語でいうと「ビーイング ナッシング」、ドイツ語では

「何者でもないのに、自分を何者かと思う、そういう人は」

とある。やはり、「ニッヒツ」という言葉が使っている。ニッヒツであるのに、自ら有りとする。本来、ニッヒツだと。

本来、無一物であるという。例の有名な碧巖録の中にありますね。味噌擦り小僧が

「本来何もないんだ」

と言った。「本来何もない」と言ったあの味噌擦り小僧が禅宗の第六祖になった。この無の自覚です。それを何者かと思うことは――これはもう私がしょっちゅう言っていること――「有ること無し」、無であるという。有と無との相対的な無ではない。絶対的な無ですよ。しかし、この絶対的無ということが自覚できないから、いろんなことが起きるわけです。「サムシングだ」と思うから。「何かできる」かと思うから。

キリスト自身がいつも仰っているんだ。

「自分は何もできない。何も言えない。神さまがさせているんだ。神さまが言わせているんだ」

と。だから、

「人間は本来、何もできないのに、何者でもないのに、有ると思ったら、これはとんでもない間違いだ」



と。パウロの言葉をもつとはつきり言えば、そういうことです。パウロがこのところで、「自分が本当はダメだ」ということを自覚してから、こういう言葉が出てきた。ところが、「本当はダメだ」ということを、ただ自分をダメだと言っているだけでは本当にダメなんだ。

「ダメなやつを神さまは使うんだ」

ということです。癖のあるやつを使う。人に何とかと言われるようなしやうがないやつを、自分でも吐き捨てたいようなやつを神さまは捕まえる。だから、自分を吐き捨てながら、自分をキリストの中に投げ入れながら進んでいく。そうすると、「メタモルフォーゼ」が起きる。変質、変貌していく。

4 各自^{おの}おのが行為^{ため}を^{ため}験し見よ、さらば誇るところは、他にあらで、ただ己にあらん。

ちよつと分からない言葉ですね。これは註解者が少し苦しむところです。

「自分の行いを試してみろ、本当に自分でできるか」

というわけです。ところが、自分は何もできない。「誇るところは、他にあらで」というのは、「他人を見て、他人の欠点を見て、自分の方がいいなんていう、そういった相対的な判断をして人を審いているうちはダメだ」

ということです。「ただ己にあらん」という言葉はむしろ逆説的な言葉で、

「自分が誇ろうとしたって、実は誇れないんだよ」

と。少し飛躍した表現であって、ここのはむずかしい。

●永遠の生命を持っている

5 各自^{おの}おのが荷を負うべければなり。

自分が神さまから課せられた荷を、さっき言った愛の荷を負って行けと。要するに、

「自分なんていうものを問題にしているうちはダメだよ。問題はキリストだけである」

ということですよ。人を問題にすることも要らん、自分を問題にすることも要らん。相手は絶対者です。絶対を相手としないかぎり、人間はどうにもならないようにできているんです。そういうように人間の魂はできている。

西郷南洲も、

「天を相手とせよ」

と言っているとおります。ところが、その天を相手にした西郷南洲は非常に思い遣りの深い人でありました。天を相手にすることが「敬天」、そしたら自ずから「愛人」、人を愛することが出てきた。私がD中学・高等学校で第一に掲げている言葉がその南洲の「敬天愛人」です。

6 御言を教えらるる人は教うる人と凡ての善き物を共にせよ。7 自ら欺^{あざむ}くな、



神は侮るべき者にあらず、

神さまのことや魂の世界をいい加減にしてたならば——ところが、今はそれが非常に多いわけだ、今の若い人たちは——

人の播く所は、その刈る所とならん。

そのとおり。因果応報でござるぞという。播くというならば、

8 己が肉のために播く者は

「肉」というのは自己本位の利益のこと。

肉によりて滅亡^{ほうび}を刈りとり、御霊のために播く者は御霊によりて永遠の生命

を刈りとらん。

これは非常に大事なことです。「御霊のために播く」というのは、

「御霊に在って」

が「御霊のために」より先です。パウロは抜かしたけれども、「ために」の奥には、

「御霊に在る」

ということがなければ、この「ために」がややもすると自己主張になる。宗教的な争いはみんなそこから来る。

「この私の宗派が、この信仰が正しい」

と言って、他を審く。それは「のために」という世界です。「その中に」本当にあれば今度は、相手の中にあるものが見えてくる。そして、お互いに尊重できる。

私は仏教をひとつも攻撃しませんよ。それぞれみんな善さがあるからね。イデオロギーの世界だってそうなんだ。みんなそれぞれイデオロギーの善さがある。ただ、限界がある。限界がね。その限界を越えて、「こうであれ」というようなことをやるから。世界はイデオロギーでは絶対に、いわゆる政党的な争いでは絶対に平和は来ない。

もうひとつ奥の人間というところで、本当の深い人間性をもつて握手をしないかぎりはどうして、こういう分かりきったことが本当に進まないかというのと、「人間性」とか「ヒューマニズム」なんて言っても口ばかりで、やっぱりその「人間性」とか「ヒューマニズム」というものが絶対なものに触れていないからダメなんです。人間性が、臭みが出てくる。絶対なものを、「如来」と言おうが、「神」と言おうがいいですよ。

御霊のために、御霊に在って——播かなくても自ずから種がこぼれていくよ、

「御霊に在って種のこぼれるものは」

というわけだ——永遠の生命がそこに刈り取られる。永遠の生命をそこで人に与えることになる。

「御霊に在る」

ということとは、

「もう永遠の生命を持っている」



ということですよ。だから、「刈り取る」というのは、他の人においてその永遠の生命を与えて、他の人に永遠の生命が実証されていく。

「私は永遠の生命があります。人は知りませんが」

なんていうのは本当の永遠の生命ではない。永遠の生命は、与えてやまざるもの、播いて尽きざるもの。流れて涸れざるものです。それがこの永遠の生命です。パウロさんはもつとはつきりものを言ってももらってもいいんだよな。

●小我が死んで大我がくる

9 われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。

これは普通の道徳的な戒めを言っているんだけど、単なる道徳を言っているのではない。けれども、人間はダメだから、そういうこともみんな説いてやらないと、しょうがないから。パウロは、いろんな人がいるから、いろんな角度からものを言っている。

10 この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ。

お互いに信仰の果を実らせるために、励ますためにやりなさいと。ただししかし、

「信仰の家族だけで他は知らん」

というのではもちろんダメです。まあ、原始福音の人たちは大いに家族的にやって、集会にも家族的にやって来るし、非常にそういった交わりは深いね。結構です。ただ、どこまでも垣根なしに進んでいくことです。

11 視よ、われ手ずから如何に大なる文字にて汝らに書き贈るかを。

「われ手ずから如何に大なる文字にて」と。パウロは時々、口授しているわけなんだよな。

12 凡そ肉において美しき外観をなさんと欲する者は、汝らに割礼を強う。

これは律法的な美わしさですよ。そして、割礼を強いる。これはまたダメだと。宗教的な儀式です。

これ唯キリストの十字架の故によりて責められざらん為のみ。

キリストの十字架の贖罪ばかり言っていると、またユダヤ人から迫害されるから、割礼もやっておこうなんていう、両刀使いみたいなもの。

13 そは割礼をうくる者すら自ら律法を守らず、而も汝らに割礼をうけしめんと欲するは、汝らの肉につきて誇らんが為なり。

この世的な意味における宗教的な、律法的な宗教の世界も、これはパウロにとっては「肉」であり「律法」であるんです。

14 然れど我には我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。

これから後が大事なところです。もうユダヤ教を、旧約を乗り越えてしまった私たちには、

「我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇るところはない。もう民族宗教ではないぞ。世界宗教である」



と。十字架で神が、神の義によって審かれたらお終いなんだから。神の御意を完全に成就したキリストの義を与えるのが十字架の贖罪です。

「十字架を受けとることによって義とされる」

というのはそのことです。

「信仰によって義とされる」

とはそのこと。だから、十字架の他に誇るところあらざれと。

十字架の贖罪を受けると、信受すると、義とされる。「義とされる」というのは、ただ外側から義と認められるくらいの意味ではない。

「神の義が、キリストの義が与えられる」

ということ。この「義とされる」という言葉がどうも少し観念的に響いて困るんですが。もともと律法的な角度の言葉ですから、観念性を持っているんですよ。けれども、内容は観念であっては困るんです。

あるところでは、

「キリストの甦りによって義とされる」

という言い方もしている。だから、十字架と、キリストの甦る霊生です。「復活」と言ったって霊生のことです。霊生はイコール聖霊のことになる。

「十字架・復活の生命・聖霊、これは分けることができない」

いつも言っているとおりです。罪からの解放、罪から自由になったと同時に、自己から自由になったと同時に、本当の生命がくる。小我が死んで、大我がやってくる。こういうわけです。

だから、割礼なんて宗教的儀式なんか問題ではない。無教会は、

「洗礼なんか問題じゃない」

と仰ることは結構なんだ。けれども、洗礼が問題でなくて、この聖霊が問題になっていなかったら、これは困るんだよ、十字架だけでは。パウロが十字架と言っているのは、聖霊と絶対に離すことのできない意味です。まあ、無教会に限らず、教会でも大体そうですね、今のキリスト教は。

私たちは、いわゆるプロテスタントでもカトリックでもない、キリストの直結である。キリストの直弟子の次元に入って行こうと、やっているわけです。これはもう、私の中にある御霊がそのことを証するから、誰が何と言っても仕方がない。

本当に受けとってくださいよ。そうするともう、一週間たつて日曜日になったらまた蓄電されなければ困る人ではなくなる。いよいよ、進んでやまない。

「先生、一年間くらい集会を休んでもいいですよ。大いに書いてください」
なんてなことを言うようにならなくては。

私はもう「自分の信仰」なんてものは問題にしてない。だから、非常に楽なんです。パ



ウロの言葉ですら、時々まだるっこしくてしょうがない。だんだん、私は簡単になつてしまつたものだから、話すのがもう、ある意味において、面倒臭くなつてしまつた。だから、聖書を一緒に読んで、集会はお終いというのが一番いいんだけどね。

●キリストと共に十字架されて我生く

之によりて世は我に対して十字架につけられたり、わが世に対するも亦然り。

世と我との関係には、そこには十字架が立っている。直接関係ではないと。我と世の間に十字架が立っている。これはどういうことですか。

「なんか、それではつまらない。なんだか、すっかり私は世捨て人になつてしまつて。

クリスチャンになつたら、これは面白くないな。もう少し映画も見たいし」

なんてね。そういうことではないですから。世が空間的な世でもあるし、時間的な世でもある。現在・過去・未来。空間的、時間的な世というものを背負っているんです、この十字架というのは。さつきから言っているとおり、「担えり」という。直接関係ではないと。

ある意味において、人種が違つてしまつてゐる。我は天国人であると。地上を天国人が歩いているわけだ。時々、円盤がやつてくるね。

「まだ、地球の人間は相手にならん」

と言つてゐるそうだ。次元が高いらしい。

もう、潜水艦一隻のミサイルで日本なんかそれで参つてしまふ。アメリカもソ連も一隻の潜水艦でお互いにやつつけることができるそうだ。驚いてしまつたね、一隻が十億ドルする。とんでもない兵器だよな、核兵器というのは。参謀本部なんていうのは、ボタン一つ押したら、たちまち相手の国へ向かつてミサイルが飛んでいくんだから。全く一触即発世界は滅びにいくという、そういう現実がお伽話でも空想でもなくなつてしまつてゐるわけです、今の20世紀の現実。これが人間というやつなんだ。

人間の一番恐ろしいのは、核兵器ではない。人間の心です。核兵器を操るところの人間の心。その心の問題はもう宗教の他にはないんですよ。政治でもなければ、芸術でもなければ、経済でもなければ、道徳でもない。これは宗教の世界です。キリストとお釈迦さんの世界。キリストとお釈迦さんの世界に本当に入つていかなかったら、人類は滅びてしまふ。

だから、今こそ本当に、キリスト教であろうと仏教であろうと、その深いところを教育者がまず身に体さなければダメなんです、教育者が。私は全国高等学校長会議で、もう三度そのことを言つた。

「校長さんたちは山に籠もつて、少し瞑想したらいかがですか」

と。もう、小池というのは変わり者で通つてゐるんだよな。そういうことがはつきり言えなければダメなんです、もう今は。終末的な現在ですから。今は遠慮していたり、とやかくと左顧右眄してゐるうちはダメ。20世紀から21世紀へ入る世界は、君たちの双肩にかか



っている。魂が本当に烈々たるものにならなかったら、どうにもならん。

「キリストと共に十字架されて、我生く。キリストわがうちに在りて生くる」

ということに、パウロと同質的なところに来なくては。問題はそれだけです。その他のことは何をしてたつていい。職業が何であろうと。問題は、その人がそういう生命を持っているかどうかです。どこの教会へ行こうが、幕屋であろうが、無教会であろうが、どこだつていいですよ。問題は、

「それを本当に生きているか」

ということだけです。

ところが、無教会主義は——私が無教会のことを言うと、また家内に怒られてしまうけれども。私は無教会の畑に育ったものだから、つい、自分の流れの自己批判をしているのであつて、何も他を批判しているのではない——たとえばそんなことだということです。悪口を言っているのでも何でもない。本当の真理のためには、時々具体的なことを言わなければ分からないものな、観念的なことを言つてたら。

勇ましく行つてくださいよ、男の人も女の人も。そういう十字架です。何だつて、このガラテヤ書6章に、「永遠の女性」なんて書いたか、あなた方は不思議でしょうがないでしょ。何の関係があるかと。この十字架から関係があるんです。もう少ししたら、お話します。

●雲の彼方には太陽が

¹⁵それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造ら

る事なり。¹⁶此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、

平安と憐憫あれ。

「新たに造られる」なんて、「新たに生まれる」だつていいですよ、どっちだつて。新生、第三の人間となること。「生きているか？」と聞かれた時に、「はい」とはつきり答えられなければダメですよ、

「どうも、この頃は調子が悪いです」

なんてでは。調子なんてものは、良かったり悪かったりするよ。人間の側の調子をいつまで良くしようとしたつて、それはそんな調子にはいかないんだ。

「調子が良かったつて悪くたつて、そんなことに関わりありません」

という返事ができなくては。

「どうも、私はまだこんな問題がありました」

なんて。問題を片づけたら、また次の問題が出てくるよ。ちょうど、雲がなくなつたつて、また雲が現れてくるのと同じで、地上は結局、相対的なものが行きつ戻りつ去来しているわけだ。その相対的な雲の世界をもうひとつ突き抜けて、ジェット機のように澄明の世界へ行く。それを持っているか、持つていないかということです。



「雲の彼方には、太陽はそれでもなお輝いておりますぞ」
と。ロングフェローの「レイニイ・デイ（雨の日）」という詩の中の言葉だな。

「汝の運命は他の人の運命と同じことだ」
と。私は中学時代にああいう詩を教わって、それで私の心の或るものができた。信仰的な英詩です。

私は古本市があると、必ず出かけて行く。昨日も渋谷の西武で古本市をやっていたから出かけて行った。いい本を見つけた。まあ、古本でいいものを見つけた時の喜びは、私はちよつと他にないわけだ。『中江藤樹全書』というのを買ってきた。漢文で書いてある。

どうぞ、烈々たるものを持って生きてくださいよ。自分をキリストの中に投げ出せばいいんだから、

何もむずかしくはない。キリストの中に投げ出すのを恐がったらダメだ。キリストは、
「来い、来い。何も心配はいらんよ、そのままでもいい。ダメのまんまでいい。分裂のまんまでいいから、頑^{かたく}なまんまでいいから、来なさい。私がみんな溶かしてしまふよ」

と言っているんだから。キリストの溶解作用は、これはもう最高のものですからね。どんな溶鉱炉も、キリストの溶鉱炉にはかなわない。こういう言葉を聞いて、あなた方は、もう何とも言えないその境地の中に樂に入っていないくは。何も、「ワッショイ、ワッショイ」と祈れと言っているのではない。

●キリストの十字架の印

この十字架。十字架で片付けられているくらいありがたいことはないじゃないですか。これ、片付いてなかったら、どうするんですか。

「私はもう、十字架で自分なんて片付いてしまってます、きれいさっぱり。相対的自分なんか問題にしてません。問題にするやつは勝手に問題にしる。私はそんなところにいないぞ」

というわけです。そういうようにして、皆さん、自分を乗り越えて進んでください。

¹⁷今よりのち誰も我を煩わすな、
と。パウロがはつきりと言った、ガラテヤ書の最後に。「いろんなことを言って煩わさないでくれよ。もうたくさんだよ」と。

我はイエスの印を身に佩^おびたるなり。

¹⁸兄弟よ、願くは我らの主イエス・キリストの恩恵、なんじらの靈とともに

に在らんことを、アアメン。

「印」は「ステイグマ」という。ここは「ステイグマータ」と複数で書いてあります。キリストの印、特に十字架です。この「ステイグマ」という字はもともと「ステイゾー」とい



う動詞からくる。錐でもって刻み付けることです。入れ墨のようにして。あれは消えないだろ。あるいは、焼き印を押すこと。焼き印を押したり、入れ墨みたいに彫りつける。これがこの「ステイグマ」という字です。アッシジのフランチェスコが瞑想して、キリストの十字架の金曜日に祈ると、はりつけ磔の掌から血が流れてきたという。霊的な現象です。

キリストの十字架の印を魂に持っている。女の人が首に十字架を下げたって悪くはないよ。けれども、それは心に持つ。愛ですからね、最深の愛の徴ですからね、十字架というのは。最深の愛の徴。最も深い愛の徴。そして、それは徴に限らない。「徴」は「セイメイオン」という字ですが。ユダヤ教でも、律法をしょつちゅう手や額のところに結わえ付けたりしている。あれもひとつの徴なんだけれども。そうでなくて、パウロは、そんな徴とは違うんだと言う。あの徴のことは出エジプト記28章に出てますが。

「キリストの十字架の徴をおびた」

という。これは自分に力となる。キリストの愛が――徴がもはや徴ではなくて――愛の實質が、担いの力が御霊と共に来た。自分は、律法ではない、キリストの十字架の徴を帯びていると、パウロはどうしてもこれを言わざるをえない。

●永遠の女性

実は私の母が天界に往ったのが19年前の明日なんです。数えて20年。1957年の1月19日です。この母は私たちのために本当に十字架を負いました。私は第二巻を母に捧げます。第一巻(『無者キリスト』)は五人の人に捧げましたけれども。第二巻(『芸術のたましい』)は母に捧げる。私の今日あるのはこの母のお陰なんです、別な意味で。この母は私にとって「永遠の女性」です。前に母のことを書きましたので、「ナルドの香油」という『曠野の愛』誌27号(1957年春季号)をお読みの方はもう御存知だと思えますけれども。

母は、信州の松代に明治2年(1869年)に生まれた。八人姉妹の第五番目。小さい時から寺子屋教育を受けて、漢籍を学ばされた。もう小学校に入るか入らないかの頃から袴をはいて。昔は漢文の先生の所へ朝早く出かけて行って、まだ門が閉じている頃に門の前で並んでいるんだそう。そうすると、先生が門を開けて、「入りなさい」と。坐らされる所は板の間の上。女の子ですよ。そして、論語の素読。これは母からも聞きました。

そういう教育を、寺小屋教育を受けたんだね、私の母は。だから、母は江戸に行つて勉強したい。17歳のときに、江戸へ行つて勉学せんと志をたて、両親にお願いをしたところが、

「女の子が一人で行つてはいかん」

とか言つて、お許しが出ない。ついに一夜、意を決して、家を出てしまう。信州の松代から小諸までやつてきた。そしたら、昔の二人力の人力車で追手がおいかけてきた。

「だめだ、帰りなさい」

「どうしても帰れと仰るなら、私の首をお持ち帰りください」



と。決意が固いものですから、追手は驚いて、むしろ路銀をさらに増してくれて、

「それでは、いらつしやい」

と言って、送ってくれた。これは母から私は直接に聞いた話です。そして、江戸に出て勉強したわけですね。安井哲子さんなんか同級生だった。

私の父は三井鉱山で、佐渡の鉱山技師だった。南米あたりにも行ったことがあるらしい。子どもは政美、龍二、富士子、三郎、辰雄、愛子の六人。私の五つのときに父は亡くなつてしまった。あとは母がこの六人を――六人のうちの私のすぐ上の兄の三郎は早く亡くなつてしまったが――五人の兄弟を母は細腕で育ててくれたわけです。我々は高等師範の附属女学校、高等師範の附属小学・中学にみなそれぞれ行きました。

一番上の兄貴は何といつても一番優秀だった。これが27歳で仆れた。本当はロンドンに行くはずだったのが、北京に行かせられたのが運の尽きで、腸チフスで仆れた。母がその最期の見舞いに二番目の兄貴と行ったわけですけれども、兄貴は仆れてしまった。それまでの母の苦闘――一々詳しくお話したら大変だから申しませんが――正直、丈夫な母でしたけれども、ついに胃腸をこわしてしまった。母がどれくらい苦労したかは、私は今でもつらつら思い出します。一番上の兄貴は家庭教師なんかもして助けていましたけれども。とにかく、五人を育てるのは大変なことですからね。いつか、『主婦の友』という雑誌に「立志伝中の女性」というので、母のことが書かれたことがある。あれをとっておけばよかったな。力戦苦闘しましたから。

それで、一番上の兄貴がやつと仕上がつてこれからという時に仆れましたから、母の悲しみと今までの過労とが一時にきて、眼をやられて失明してしまった。緑内障です。50歳のときです。それから88歳まで38年間失明。一時は自殺したかったらしい。この母に私はとにかく大学まで出させていただいたんですから。具体的な恩人としては、何といつてもお母さんです。

●太陽の如き女性

「永遠の女性」というのには三通りある。恋人を永遠の女性と思う人もある。それから、自分の妻を永遠の女性と感ずる人もあるし。それは一人ひとりの運命によつていろいろだ。藤井先生というのは正にその奥さんの方です。ダンテは恋人の方だね。ゲーテはどうかというと、恋人だと思うでしょ。それもそうでしょうけれども、ゲーテのことをちょっと私が皆さんに読んであげるから。今度の第二巻にこれも載せますけれども。

「周知の如く、彼の生涯には、彼の心魂をそれぞれの時期において進展させ、詩作の泉たる役割を果たした女性たちが、玉の緒の珠玉のように連っている。しかしそのような一連の女性たちの第一に立つ女性は誰であろうか。フリーデリケかロッテか、リリーかフラウ・フォン・シュタインか、妻となつたクリスティーネか、『ディーヴァン』の



マリアンネか、それとも最後の恋人ウルリーケか。彼の恋人たちの中でも以上の七つの星の如き七人は夫々決定的な役割を演じた女性たちではあったが、根源的な要素を彼の中に植えつけたものは、実に「Gauja」といって敬愛された彼の母カタリーナであった。

彼の母は太陽のような「陽気な性格」と「創作のよろこび」をゲーテの存在に血と共に頒ちあたえた。」

文学的な才能はこのお母さんからきているんです。それから、非常に明るいゾンネンハフトな――ドイツ語で「太陽を持つているような」――太陽的な、お母さんがゾンネ（太陽）の如き女性^{ひと}でね。また、ゲーテは不思議に、時計の短針と長針が天を指して12時が鳴っている時に生まれたという。これをお母さんから聞いたんだね、ゲーテが。即ち、

「中天にある太陽を時計の針が指している時に私は生まれた。私はゾンネンキント、太陽の子である」

と。死ぬ時も、

「もつと光りを」（メーア・リッヒト）

と言った。お母さんがそういう太陽のようなひとなんです、性格が。これはよく聞いてくださいよ。

「彼女自身の次の告白は、何ものよりも母の本質を語っている。階級も年齢も性別も問題でなく、どのような人も私のもとから不満をもって去ったことがないという恩寵を私は神様からいただいております。私は人を本当に愛しております。そのことは老若を問わず感じていきましょう。私は別に求めるところなく世を暮します。それでどんな男のひとにも女のひとにも快く思われるわけです。誰れに対しても道徳的な批判はいたしません。いつもその人の善い面を見るようにつとめ、悪い面は、人間を形成し角をけずりおとすことを最もよく御存じの方（である神様）にお任せします。こういった生き方で私は楽しく幸福に暮しています。」

これがお母さんの言葉です。

実にゲーテの母自身が太陽のような性格であった。この告白の中には神的な明るさがある。この母の如く、パリサイ根性の微塵もない、どんな人をもその善い面に即して愛してゆく心は、いわゆる宗派的な宗教心よりもはるかに高くはるかに広い心である。それは、イエスが『天の父は悪しき者の上にも善き者の上にもその太陽を昇らせ、正しき者にも正しからぬ者にも、雨を降らせなさる。だからおまえたちの天の父の全きようにおまえたちも全くあれよ』（マタイ五・四八）

これはキリストの最高の言葉ですね。私たちに神さまと同じであれと。

と言った神的完全性に通ずる心である。……母カタリーナにおける永遠的女性は正に愛であった。それが、ゲーテのたましいの中では男性的な情熱に変貌をなして宿って

いた。それゆえに、彼の愛は恋人に先んじて存在し、彼の恋人となる女性に出会えば、情熱の炎を發したわけであろう。」

それから創作にかかっていったと、いろいろ書いてあるんですけども。

お母さんに対しては、彼は本当に感謝しています。お父さんはなかなか気難しい男だったらしい。お母さんは相当我慢しなければならないところがあつたらしい。ゲートとお母さんの歳の差は18歳で、お父さんとお母さんの差が20何歳で、お母さんの方が近いんです。それくらいゲートのお父さんとお母さんの年齢は非常に隔たっている。非常に想像力の豊かな物語をよく読んでくれたらしい。それが彼の小さい時の深い印象として残っていることが書いてあります。大きくなるまでに、母は自分の創作の相談相手として励ましてくれた。作品のこともよく読んで、いろいろ導いてくれたらしい。

「母の優しい一言は、哲学者の百の論議よりも私を安心させました」という。それがゲートのお母さんです。

●絶対者と結びついたところ

しかしながら、永遠性というものは――男なら「永遠の青年」だね――その絶対者と結びついたところに誰でもくる。ゲートやダンテの別な面のことまでも言う必要はないけれども。それは、「ゲートとダンテの恋愛比較論」というのを私は書いたから、それを読んでもらいたい。けれども、ゲートの本質はこれのお母さんから来ているということを、へたすると、普通の人はうつかりしている。

大体、偉い人のお母さんというのはみんな質がいい。頼山陽のお母さんもそうです。リンカーンのお母さんもそう。あげてくればきりが無い。北条時頼のお母さんもそうです。だから、女性教育は実は非常に大事なんです、日本では。これからの第二の国民の――子どもがあるないにかかわらず――女性は第二の国民の母である。その点では、頼山陽のお母さんも一面厳しいものを持っていた。ただ甘いだけのお母さんではダメですよ。それではみんなドラ息子ができてしまう。ドイツ人が言うよ、

「日本の若い人のお母さんたちは甘すぎる」

と。本当の愛はやはり厳しさをもっている。私の母も相当おつかなかっただす。けれども、私は父がいなかったから、一番上の兄貴がお父さん代わりでした。母の何とも言えない愛はいつまでも、忘れるどころではない。まあ、皆さんもいろいろ自分の体験をお持ちだと思いますが。

要するに、「永遠の女性」――「永遠の男性」という言葉はあまりないようだけれども、まあ、「永遠の青年」という言葉にしよう――永遠の青年にしる永遠の女性にしる、問題はこの永遠性ということです。滅びないんです、永遠性というものは。滅びざるもの。地上の生涯がどんなに短かろうが長かろうが、そんな相対的な長短は問題ではない。一日において、



一瞬において即ち永遠を持つという意味です。要するに、永遠性を持たないような人であつたらつまらないということです。

「永遠の生命」という言葉がありますけれども、永遠の生命というのは、永遠性を持つている生命ということなんだ。生命が永遠に長いというのではない。永遠性を持った生命。死んでも死なない永遠性を持っている。キリストの直弟子たちのように、言葉の一番深い意味において、キリストと直結しないことにはこの永遠の女性にも永遠の青年にもなれない。

「あの人は忘れられない」というような印象を残す。忘れられなくて、それが自分の中で何らかの意味で生きてくる。私の兄貴なんかもそうだ。私は今72歳だけれども、ちょうどひっくり返すと27歳だ、兄貴は。私は72歳になっても、この兄貴の顔を見ても、私にはいつまでたっても兄貴ですよ。こっちの方が少し古いような顔をしているなんて思ったことはない。いつも私にはこの兄貴は兄さんなんです。それで私は若いのか何だか知らんけども(笑)。九つちがうんだ、私の兄貴とね。この兄貴を持ったことも掛け替えがないし、この母を持ったことも私には掛け替えがない。

母は担任の生徒を五回持った。そしたら、卒業してからいつも代わりがわりに母を訪ねてくれました。昔の師弟関係というのは非常にそういうところが美わしいね。この頃はもうどの程度だか知らんけれども。

●キリストという永遠者

なにさま、日本人はだいぶずれてしまったな、いろんなことが。本来の日本の善さというものがどこかへ行ってしまった。それから、この福音によつてそれをみんな生かしていくことをしない。キリスト教というのは何かバター臭いようなキリスト教だと思っている。有賀先生も私のものを読んで、

「非常に日本的な筆で共感した」

と言う。この二人の方から――キリスト教界のおおだてものの二人ですよ――お返事をいただいた。人にどう言われてもいいんです。私ははっきり確信がありますから。この第二巻もおもしろいよ。「おもしろい」という言葉が当たるかどうか知らんけど。もう、第二巻の準備にかかっているんです。とにかく忙しい。けれども、本屋に頼んじやうと、読者との交わりが全然ないでしょ。こっちはいろんなことで面倒臭いけれども、しかし、読者との交わりは、やつぱりこの刊行会的なやり方でいくといいわけです。なかには、

「そんなの頼みませんでした」

なんて言つて送り返すやつがいる。こっちが間違えたんだけれどもね。

「ああ、これはいいものが来た」

と言つて開いて見ればいいのに。開いたらいいんだけど、また結び返したらいい。そ



ういう縁無き衆生がいるよ。

私の母は正直、女性として及ぶかぎりの重荷を負った。子どもが五人もいるから。皆が普通の学校のお弁当でバターを付けているのに、私はバターが買えなくて、ジャムかお砂糖をつけて食べた。みんながランドセルなのに、私もランドセルが欲しかったが、ランドセルが買えない。門なんかある家ではないですよ、いきなり格子戸です。私はそういう幼年時代を通じてきた。だから、今こんな住まいで本当にお母さんに申し訳ないくらいです。やはり、この母やこの兄の恩と言いますか、存在と言いますか、これはキリストに在って切っても切れない関係にある。どうぞ、皆さんも、人生のいろいろな経験を通して、この永遠の女性、永遠の青年であっていただきたいわけです。もう出来上がったようなのはダメですから。

まだまだ、これから私は仕事があるから、少なくともあと20年はやらなければならない。92歳、天野先生と同じです。まあ、大体、そこらまではいくつもりですけれども。全然衰えないものね。全然と言ったらおかしいけれども。もうとにかく、時間が惜しくてしょうがないよ、校長なんていつてハンコなんか押してたんじゃ(笑)。余計なことばかり言って困りますね。

「もう、小池なんてやつは辞めさせてしまえ」

なんて言うかも知れない。そしたら退くかな。辞めさせられない前に退いた方がよさそうだ。とにかく、自分の目的に向かって、使命に向かって力いっぱい生きてください。これは学生に私は言っているんだ。

「自分の天賦に対して、天賦のあるところに天職があるから、それに向かってまっしぐらに行け。平均点が何点なんてくだらないことを考えるな」

と。私なんかはもう、

「日暮れて道遠し」

というわけで、徹夜で夜通し歩くつもりだから。人生の夕暮れから次の夜明けに向かってね、星の光に照らされて。「螢の光、窓の雪」というけれども、星の光と何とかだ。

どうぞ、この集会は小さくても、皆さんが本当に、切れば血が迸り、叩けば鐘が鳴るような――先程の内村先生の、

「後世の最大遺物というのは崇高にして勇ましき生涯である」

という――そういった、「崇高にして勇ましき生涯」を御名に在って、御名のために、この福音を証しせんがためにと行って進んで行く。何をしていても、その存在、その生き方自身が福音の証であることが、本当の永遠性を持っているということです。永遠性の現象は福音の証、証人である。どうぞ、皆さん一人ひとり永遠の女性であり、また永遠の青年であってほしいわけです。これがキリストが喜ぶたもうところの在り方なんです。即ち、キリストという永遠者をうちに宿して生きる者がそうなる。キリストという永遠者をうちに宿さなかったら、そういう生き方はできない。



● 弔い合戦

私の母はそうのように私たちのために十字架を負ってくれました。だから、私の生涯は、母と兄貴の弔い合戦なんです。目的を果たすまでは、簡単に死ぬわけにいかない。復讐が成るまでは。仇討ちのためにはよく日本中を歩くよね。何も私は仇討ちをするわけではないけれども。そういうことであります。この母の告別式から私は録音を始めたんです。録音の第1号がこの告別式なんです。どこかにあるはずです。ミルトンの詩なんかもここに引用してあったな。イザヤ書35章もね。

「⁵その時しも盲者の目はひらけ

聾者の耳はあくべし。

⁶その時しも跛者は鹿の如くに跳び走り、

唾者の舌は歡び歌わん。

然り曠野には泉水たばしり、

沙漠には川流るべし。

.....

¹⁰実存者に贖い救われし者、帰り来らん、

彼らは歡び謳いてシオンに到り、

その首には永遠の歡喜あらん。

歡樂と歡喜とを彼らは勝ち得、

悲哀と悲嘆は逃げ去るべし。」(イザヤ35・5〜10 私訳)

という。これは私の訳ですが。イザヤ書35章です。

女性で、やはり独り黙って十字架を負った生涯を歌ったブライアントの詩「勝利者の墓」というのがある。

「彼女の栄光は此の影の国土のものではない、

時限の流れにつれて亡び去る栄光ではない。

彼女、碧玉の門に突き入りしとき、

どんな喜悅がその天つ瞳に輝いたろう！

天の淵は歡びに輝きどんなにどよもし迎えたか、

天の花は手もあでやかにどんなに舞い躍ったか！

而も彼、その昔

痛苦と侮蔑と悲哀とを荷なつた彼

あの強い受難の人は、甘美な聖顔で

御座からこのかわい旅人に微笑んだ。

彼こそは栄光の中、墓から還り、

「死」の剣を奪つて鎖につなぎ、これを奴隷とした人である。」(私訳)



キリストが罪と死とサタンと陰府^{よみ}を征服したから。
キリストに歓び迎えられたこの無名の女性のよつに、私の母も celestial eyes 「天眼」
を賜って歓呼していることでしょう。」「『曠野の愛』誌27号「母の生涯」より）
と。ま、申し訳ないです、少し私事にわたりましたけれども。

●永遠の女性われらを引きあぐ

ゲーテの『ファウスト』の最後の「神秘の合唱」のところに、

"Alles Vergänglichhe 過ぎゆくものはすべて

Ist nur ein Gleichnis; 映像にすぎず。

Das Unzulängliche 満ち足りざりしもの

Hier wird's Ereignis; ここに出現し、

Das Unbeschreibliche 名状しがたきもの

Hier ist's getan; ここに成就せり。

Das Ewig-Weibliche 永遠の女性

Zieht uns hinan." われらを引きあぐ。

とある。どこへ引き上げて行くかというところ、それはゲーテは書かない。ゲーテが書かないので私が付け加えた。

Mit Lieb' und Wonne 愛と歓喜^{よろこび}をもって

Zur heiligen Sonne! 聖なる太陽へ！

ゲーテは「ゾンネ」（太陽）が好きだから、私も最後を「ゾンネ」で結んでやった。ゲーテさんは日本に、

「とんでもないやつがいる」

と思ってるだろう。ちゃんと韻を踏んでいる。

「愛と歓喜^{よろこび}をもって神聖なる太陽に向かって引き上げていく」

と。即ち「神聖なる太陽」とは神さまです。永遠に女性的なるものは我らをそのように引き上げていく。女性が本当に男性をそのようにして導くならば、助けるならばこれは永遠の女性であります。

ゲーテに一番、その意味において、心情の上で貢献したのはフリーデリケという女性です。彼の『ファウスト』の「グレートヘン」は彼女がおそらくその下地になっているはずで。とにかく、永遠の男性はまた女性を、永遠の女性はまだ男性を、お互いに助け合って、そして神の国へ連れていく。キリストのもとへ連れていく。これが、

「互いに十字架を負えよ。荷ない合って行けよ」

ということでもあります。終わります。

